

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「感性」と「制度」のただなか、あるいは狭間をフィールドに＜共同研究：感性と制度のつながり：芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2023-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, しらべ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/0002000018">https://doi.org/10.15021/0002000018</a>

# 「感性」と「制度」のただなか、 あるいは狭間をフィールドに

緒方 しらべ

## 「密」になった人類学者、キュレーター、考古学者

本共同研究は、制作や展示といった芸術実践において、モノゴトや制度を含めた諸存在のはたらきにおける喚起と評価のあり方に注目し、感性と制度の不可分なありさまを検討してきた。両者の不可分性に注目したのは、これまでの芸術の人類学において、感性についての議論と制度をめぐる議論の交点に注目した研究がほとんどなかったからである。

この課題に取り組むため、本共同研究では、芸術を人類学的に問う5名の人類学者（緒方しらべ、兼松芽永、田中理恵子、登久希子、渡辺文）、芸術とともに探究し実践する3名のキュレーター（橋本梓、長谷川新、竹久侑）、今日的な芸術の枠組みとは異なる観点から感性や制度について研究する考古学者2名（寺村裕史、光本順）の合計10名で、報告と議論を重ねてきた。本共同研究会が2019年秋に発足して間もなく、日本はパンデミックの影響を受けることとなった。2020年春から2021年夏にかけて国内外での集中的な調査を予定していたメンバーたちは、調査内容や調査地の変更を余儀なくされた。それでも、救済措置として1年間の研究期間延長が可能になったことで、上記課題に悩みながらも前向きに取り組むことができた。また、10名全員が民博に集まることのできた初回の1回以外、コロナ禍において全ての研究会をオンラインのみまたはオンラインと対面の併用で開催したことで、結果的に毎回ほぼ全員が研究会に参加でき、「密」にコミュニケーションを取ることが叶った。

## 異分野／異なる立場からの報告

人類学者の登は日本の展示空間で発露する暴力に関する関係者の感情あるいは感覚の共有や作品の喚起力について、渡辺はフィジーにおけるDV被害の現状とアートや制作の場を介したケアとの関わりについて検討した。同じく人類学者の緒方はナイジェリアの地方都市で最も親しまれるギフトアイテムと呼ばれる作品群、兼松は新潟中越の芸術実践および美術教育、田中はキューバの芸術音楽の事例から、制作や表現の実践とそれを成り立たせるモノゴトや制度が複雑に、かつ、必然性をもって連なり絡み合うさまを報告した。キュレーターの3名については、コレクションの有無や役割が異なるハウスキュレーター2名、特定の組織に属さないインディペン

デントキュレーター1名が、それぞれ違う立場から次のように報告した。橋本はかたちに残らない芸術の収蔵や展示を通じて明らかになる美術館の制度の弾力性と感性の胆力が示す柔軟性、長谷川はアーティストほか幅広いアートワーカーのために自ら実践する相談（Soudan）という取り組み、竹久はアートセンターにおける長期ワークショップの身体経験に基づく個人体験の共有や多様な感覚の共存について事例を報告し、議論を行った。考古学者の寺村は考古資料の実測や3Dスキャンによる記録づくりのルールや約束事と記録者の身体感覚の交差、光本はモノや土地の痕跡から過去の政治体制や交易関係など制度を明らかにすることを旨とする日本の考古学を、感性や身体感覚、喚起といったキーワードから捉え直す試みを報告し、感性と制度の不可分な結びつきのあり方を具体的に検討した。いずれの報告においても、当該分野の研究者とは異なる視点から鋭い質問が投げかけられたり、それぞれの常識の違いが露呈することで議論が深まったりした。自身の研究への新たな糸口が見つけたという点で、異分野のメンバーが集まる意義が発揮された研究会であったといえる。

また、2021年度に特別講師としてオンラインで招聘した古谷嘉章氏（九州大学名誉教授）の著書『縄文ルネサンス—現代社会が発見する新しい縄文』（平凡社、2019年）の合評会、および古谷氏からの本共同研究へのコメントを通して、制度の外ないし上にある感性の可能性や、制度化されていない感性の可能性という視点を得ることもできた。



キューバ共和国ハバナ市内のサロンで行われた新曲演奏会にて。このとき演奏された音楽と映像のコラボレーション作品を制作するために、映像作家が撮影を行っている。（2019年3月30日、田中理恵子撮影）

### 緒方 しらべ (おがた しらべ)

上智大学グローバル教育センター特任助教。専門は文化人類学、アフリカ地域研究。著書に『アフリカからアートを売り込む—企業×研究』（共編著 水声社 2021年）、「こんなことはいくらでもあったし、これからもある—ナイジェリアの都市で暮らす人びととパンデミック」浜田明範ほか編『新型コロナウイルス感染症と人類学—パンデミックとともに考える』（水声社 2021年）などがある。



相談所の様子（2023年4月26日、東京都 YAU STUDIO 内給湯室、長谷川新撮影）

## 水と油かドレッシングか

全13回開催した共同研究会を通して見えてきた1つの方向性は、人類学、芸術学、考古学という3つの分野から持ち寄った複数の事例の比較や結びつきから、感性と制度は相反するものとは限らず柔軟に関わり合うこと、ゆえに、芸術のあり方や価値判断は常に変容の可能性に開かれていることを示すことである。しかし、だからといって、端的に感性と制度は二項対立的なものではない、と結論づけるのは単純すぎる。たとえば橋本が、国立の美術館という制度的な組織の内側から芸術家と交渉を重ねる過程で垣間見た制度の弾力と芸術の胆力について指摘するように、あるいは長谷川が自身の活動が博物館法に規定されない柔軟さを特徴としつつ、同時に無根拠な実践でもあると表現するように、感性と制度が対立的な存在だからこそ生じるコンフリクトや折衝過程からしか露呈しないそれぞれの特質もある。その意味で、古谷氏の指摘する互いに相容れないものとしての感性と制度を捉える視点も重要だ。

3年と5か月続けた本共同研究で明らかになってきた感性と制度が必ずしも水と油のように溶け合わないものではない点については、両者それぞれの特質を描き出しながら、かつ、両者のつながりを見出すメンバー10名の論考やエッセイを通してまとめたい。感性と制度、そのどちらが酢でどちらが油になるにせよ、両者が美味しいドレッシングにもなりうることを示したいと考えている。

さらに、私たちは感性と制度の多様な結びつきを踏まえ、1980年以降、芸術のあり方を問う人類学において乖離していた両者を交差させるための理論的枠組みの構築を目指した

い。これについては、人類学者5名で引き続き議論していく予定である。

最後に、本共同研究で検討してきた長谷川の事例である相談（Soudan）にふれたい。インディペンデントキュレーターの長谷川は、展示や展評というシステムに限定されないアートをめぐるさまざまな行為や立ち位置・境遇に注目し、アーティストやキュレーター・技術者らを含むアートワーカーのちょっとした専門知の共有や具体的な技術相談、悩みを打ち明ける場として相談窓口を開いてきた。この実践がコロナ禍を経てなお現在進行形で続いているのは、制作実践から展示・評価に至るまで多様な専門知や技術、感性や感覚が複雑に絡み合う状況において、複数の制度の狭間で感う人に寄り添う場が必要とされているからだろう。長谷川は、いくつもの相談に応じる場を築いてきた経験から感性と制度の交点を見据えている（緒方 2023）。

このように、本共同研究では構成員10名がそれぞれのフィールドにおいて、感性と制度のただなかで、あるいはその狭間で調査し、検討し、実践してきたことを10名で議論し、考察してきた。その成果図書の出版を2024年度に定め、2023年度はオンライン限定の「密」な原稿読み合わせ会に毎月励んでいる。

### 引用文献／URL

- 緒方しらべ 2023 「教育普及事業 アートをやる2」『京都精華大学展示コミュニケーションセンター2022年度活動報告書』：12-15。  
(<https://gallery.kyoto-seika.ac.jp/about/2022-report.pdf> 2023年4月27日閲覧)
- Soudan <https://pair.notion.site/pair/Soudan4c3d569de4b34a04bb78ec49ceb70f91> (2023年4月27日閲覧)